

生徒会長

こくせんがんあげは

黒泉院鳳蝶の

屈辱

プロローグ 黒泉院の鳳蝶様

第一話 乱された風紀

第二話 喘ぐ性欲使所

第三話 悪魔のメイド

第四章 蜜林の部活動

エピローグ 学園の猥褻物

006

021

090

146

205

241

登場人物紹介

Characters



こくせんいんあげは
黒泉院鳳蝶＝ツァウエツェル

私立黒泉院学園の理事長の孫娘。学園の風紀の悪さを心配し、生徒会長と風紀委員長、新体操部の部長まで兼任する才女。

わたなべけい
渡辺啓

黒泉院学園の学長の甥っ子。鳳蝶率いる生徒会の役員のひとり。

わたなべ
渡辺学長

黒泉院学園の学長。「好々爺」然とした風貌で、生徒にも人気がある。

かなざわきんこ
金沢吟子

鳳蝶に悪事をばらされ、停学処分になった女生徒。

しらかわじゅり
白川樹里

鳳蝶の屋敷で働くメイド。

付属の鈴を鳴らし、飼犬の証を嵌められるしかない。

嫌がる醜態を無様に晒すくらいなら。

「これでわたくしを従えたつもり？ ……必ず、十倍にして返してあげるわ」

あえて鳳蝶は背筋を伸ばし、白いうなじへと、首輪を通すのを許してやった。頑丈な鎖で首まで繋がれては、いよいよ脱出も難しい。それでも相手は愚か者の集団だ、チャンス逃しさえしなければ、逆転の余地はあるはず。

(勝った気にさせておいてあげるわ、金沢。今だけ——)

ジャラッ！

などと、思案に暮れていられる状況でもなかったか。

「あくう？ な、何よいきなり！」

金沢に鎖を引かれて、つんのめり、危うく転倒しそうになる。腕を背に拘束されていては、手をつくことができない。代わりに柔軟な新体操選手は、落下する乳房の下に、利き脚の太腿を滑り込ませた。ちょうどボールを背中から左脚へと転がすような、競技のポーズである。アンバランスに姿勢を維持しつつ、息を荒く吐く。

「つらそうね、風紀の黒泉院。そんなことで耐えられるのかしら」

「はあつ、あなたとは……く、鍛え方が違うの、よ」

取り巻きの男子が唐突にどっと笑う。

金沢も酷笑を浮かべて、化粧だらけの顔面に皺を入れた。

「アッハッハ！ さあ、始めましょうか？ フフフ……」

含み笑いととも背後にまわり、不穏な気配を忍ばせてくる。金沢の行動を最優先に警戒して、鳳蝶は背中越しに大きく振り向き、バイオレットのヘアを片方の肩に集めた。

（わたくしのリボンで一体……？）

考えないようにしていた不安が頭に広がっていく。左右対称に流麗な曲線を引き締めるヒップが、ぷるぷると弱く震える。

尻谷で空気に違和感が生じ、思わず竦んだ。

「なっ!? あっ、あなた何をして」

冷静沈着を装っていた生徒会長も、さすがに動揺した。反射的で当たり前の抵抗のため身じろぎ、リボンの苦しい締めつけを全身で味わう。汗が存在感を増し、レオタードを肌に吸着させる。お尻を保護する一枚きりの薄布を、右にぺろんと捲られたのだ。

さらに尻割りの両手で谷間を広げられてしまう。

「これだけケツがデカいと、よく見えるわね。あんたの汚いところ」

「……………ッ！」

反抗の声が声にならない。灯火程度に抑えていられた羞恥が、炎となり、美貌を赤々と染め上げていく。同時に、お尻の小さな窪みでも、局所的に体温が燃え上がった。

「ど……どこ、までも……!! いい加減に、ああっ？」

細腰の脇にぶらさがっていたリボンのスティックを、金沢が手に取り、狭い出口を柄尻

で圧迫する。経験のないくすぐったさが穴に群がる。

「こんな形してんのね、ケツの穴って。こっちで感じる女もいるらしいけど」

「どこを、み……見ないで！」

弱気な台詞を口が勝手に滑らせた。ある程度はコントロールできるつもりなのに、制御が利かない。太腿をいくら閉じてても、羞恥に敏感な肛門は外気に触れてしまう。

男子二名が立ち上がり、各々の携帯電話を開いた。

「俺らが生徒会長サマにも見えるように、手伝ってやるぜ」

ひとり後は後ろにまわって、もうひよりは鳳蝶の目の前にスクリーンを差し出す。通信が始まり、そこに肉体の一部が映像化された。

（や、やだっ！ 何よコレ？）

映し出されたのは正真正銘、自分の出口らしい。ピンクのレオタードから食み出すことがないよう、性毛の類は丁寧に剃ってあるため、丸見えだ。

セピア色の皺を一点に集めた、小さな窄まりが、鳳蝶本人の視線にもひくつく。

「くふう？ あ……あつ、あふ」

リアルタイムで目にしていれば、体感的な疼きも生々しい。尻穴一帯が熱を持ち、よく張ったお尻もほんのりと火照り出す。発熱は感度を不必要に高めた。

「エロいカラダしてやがるよな、ほんとによオ」

肉づきのよい裸の太腿を、男に軽く撫でられるだけでも、ぞわぞわとした悪寒が背筋を

這い上がってくる。嫌悪感に身を痛く振らせてから、縛られているのを思い出す。

「わたくしに触ったのは誰？ はあ、憶えてなさい……二度とこの学園には」

「おーおー、『私には権力があります』って発言、ムカつくよな」

ただでさえ苛立たい口調の台詞が、耳に残り、頭に意味を反芻させる。このような輩に正論で返されたことに気付かされ、鳳蝶は、悔しさと自己嫌悪に駆られた。

「今のはそういうつもり、では……あつ？ ああああ!？」

ほんの一瞬の、心の隙を狙い澄ましたかのようなタイミング。金沢の指がぬぶり、と肛門に侵入を果たしてしまう。

「なつなにを、変態！ そ、ひあつそんなところ！」

「へえ、エロい声も出せるんじゃない？」

物理的な違和感が出口付近でくしゃつと曲がり、窄まりを念入りにほぐす。日常の生理から逸脱した悪戯に、恐怖と、尻穴ならではの恥ずかしさを禁じえなかった。本当にそこに穴があることを実感させられる。

携帯電話のスクリーンでは彼女の中指が、第二関節まで埋没しており、外部の親指は小円を描いていた。視覚の情報と肛門での感覚が、寸分の狂いなく一致し、指の捻りに粘膜がみっちり絡みつく。真空の穴は想像以上に深い。

「んふううう……！」

悶え汗を額に浮かべ、鳳蝶は少しずつ前のめりになった。乳果実の重量を支えていられ

なくて、寝そべり、真後ろに伸びる右脚を引き攀らせる。

排泄器官から指を外されても、残留感があり、肛門の緊張感が高まる。

そこに今度は、リボンのスティックを逆さに差し込まれた。中指と同程度の太さだが、直線的でやたらと長い。

ずぶずぶ、ずぶつ！ ずぶずぶずぶ！

「ああつあひいい？ いいいぐ！」

たまらず鳳蝶はしゃくりあげ、首輪の鈴をシャランと鳴らした。結腸の長さを測るような差し込みで、拡張感は十秒以上も続いて、生理的な胴震えを止められない。

「あうぐ！ やつやめ、壊れる、おおつ、オシリ！」

先ほどの中指では届かない深さも、先端でこじ開けられていく。

「アハハッ！ こんなにすんなり入るモノなの？」

「AV女優だと腕が丸ごと入ったりするんだぜ。これくらいどうってことなくね？」

自分の肉体に裏切られていく気分だ。

(どうして……なんで入っちゃうのよ、こ、こんなに太すぎるのに！)

先入観だけなら入るはずのないモノを、湿った小穴が食べている。予想していた痛みはなく、生まれた時から慣れすぎた、排泄の快楽にお尻をわななかせてしまう。

ずぶずぶずぶつ！

取り巻きの男子は総立ちになって、背後に群がり、金沢も目を丸くした。生徒会長の尻



締めつけの強力な箇所で牝痺れが始まり、火照る肉体を駆け巡った。昂りに胸の内側を乱打され、双乳がてのひらごと跳ねる。鳳蝶が開脚姿勢のために、ペニスはアナルをより深く穿り、先端の激突を背骨にも感じさせた。

「おふいいひに！ くるつきへるはら、つはめ！ はめれええ！」

「会長も向こうで、ハアッ、感じまくってるな！ エロい声しやがって！」

快楽で得意になった男子が、下卑た笑みに涎をぶらさげ、暴れるお尻を追い続ける。体温の上昇によって赤く茹で上がった尻頬を、ぱしんと叩き、鳳蝶を驚かせる。

「ひゃふっ？ ええっめふれるう！ めくれれれる！」

生徒会長の尻穴は富士壺そのものに裏返り、男性の茎胴を丹念に磨いた。黄濁の蜜が量を増やし、蟻の門渡りを伝っていく。

「えくれふはらっあおお！ おっおぐうあも！」

前の穴も、ギャグボールで分泌を活性化してどろどろだ。セーラー服の中央をネクタイで格好よく決めている生徒会長は、尖った乳芽に指を二本ずつ急行させ、熱い肛門快美に悦よがる。両脚の蟹挟みを狭くして、アンバランスに、必死にしがみつく。

（こんなみつともないポーズ！ 脚、脚を閉じないと）

姿勢を戻そうにも、開脚だからこそ開拓されたアナルの新しい深さに、脚は甘く痺れるばかり。足首の交差をX字に決め、トゥ・シューズの爪先で小さな円を描く。

そのような現場に、次の客が集団で訪れた。

「始まったのかよ！ 早速、盛り上がってんじゃねえの？」

「黒泉院会長のポーズ、どうなってんだ？ アナルか！」

最悪のタイミングだ。来客から一斉に好奇の目を、お尻に向けられる。無駄にアクロバティックな新体操のポーズングを、まじまじと複数に観察される。

生徒会長の乱れぶりは大好評だった。

「こいつはまた、生徒会長様にあるまじき事件だぜ？」

「いやいや、生徒会長じゃなくて、学園備品の公衆便所だから問題ないだろ」

競技場で採点されるのであれば芸術的ですからある肉体のしなやかさが、今だけは猛烈に恥ずかしい。顔を赤らめ、誰にも合わせられない目を床へと逃がす。

（わたくしを誰と知ったうえで……！）

かえって仕切りガラスのせいだ、結合部の注目度が上がっているのかもしれない。男子一同はペニスと繋がる肛門の、淫らな包容力に感心し、我先にズボン脱ぎ捨てた。

「とっとりあえず俺もう、いつ、一発目！ チンポ汁出ちまう！」

ビュルビュルビュル！ ドクン！ ビクビク！

再び漏らした感覚が逆流してくる。腸内射精を鳳蝶は、今回はすぐに自覚し、チンポ汁とやらが増量していくおぞましさに身震いした。

「れへふ……まは、ら、らはれてる……ッ！」

虚ろな目を見開いて、端正な美貌を、淫蕩と羞恥の赤二色で染める。ギャグボールの性

能は恐ろしく、涎を嚙下しようとするれば必ず咽が詰まった。拡張維持の唇から垂れ流すし
がなく、唾液が溜まるたび、敗者の惨めさに鼻をすする。

(わたくしが、黒泉院のわたくしが、これでは……オモチャじゃないの)
悔しさを菌噛みすることも許されない、陰湿さだ。

「交替、交替！ 公衆便所はみんな使わないとな、ハハッ、それは校則にあるし」
「お、本当じゃん。トイレは生徒全員で共同とする……って、このためだろ！」

男子便所という汚らしいイメージが、今のアナルには妥当すぎる。

(昨日までのわたくしなら……誰も、絶対にこんな真似)

彼らの躊躇のなさにも、黒泉院鳳蝶の品位がどこまで貶められたのか、痛切に思い知ら
された。気高く美しい生徒会長として、皆から総出の歓迎を受けつつ、廊下の真ん中を我
が物顔に歩くことは二度とできないのか。

「かふいにも、ほぐえんいんのれいとが、じはくをもひつ、ひふうん！」

「黒泉院の生徒が、何だって？ あー、会話はだめなんだっけ。生徒会長のケツをやれる
んだもんな、会長様のルールにはちゃんと従いますって」

連中のせせら笑いは侮蔑的ですからある。

「ハアッ！ よ……よし、次のヤツ？ ハア、交替な」

肉棒は精を吐くだけ吐き捨て、若干萎えることで、窮屈な空間を抜け出した。続けざま
に新たな男子が背後を取り、他の者は協力して、鳳蝶の下半身を固定する。

「いっひれひゃ、らめ！ らめえええッ！」

「くっ、くう……ハア！ いっいいいぜ、あとはなんとか」

三本目の挿入が軌道に乗ったところで、脚を蟹挟みに組み上げられる、尻穴新体操部の美女。挿れる快楽で早くも喘ぐ男子は、レオタードの縁を乱暴に引っ掴んで、残りの太幹も小穴に埋めていった。

ずちゅずちゅずちゅ、ぐぼぐぼ！

「あああぶあ！ あふっおひり、ひっひろら、いおがつれふ！」

精液のせいとか、途中で沼地に沈むような音に変わる。自分の体液でないエキスが、直腸にこれまで以上の潤滑性を与え、勃起を奥までスライドさせる。脚を広げているからこそその深さに嵌まり、相手の下腹部と密着もした。

精液ローションの効果は絶大で、日常の排泄の二倍近い速度を肉門が受けている。

「すっすごすぎるって！ ハアッ、い、一分も持たねえよ、ハアハア！」

「あひいあああら！ もおらめ、んぷふあつ！ らめっらああ！」

もう考え事の余裕などなく、ギャグボールから生唾を飛び散らす。生徒会長は得意のいやらしい蟹挟みで相手に掴まり、踏切板の軋むリズムにお尻を乗せた。

「らかは！ ふっふづけはいれってば！」

怒鳴りたい分だけ涎を垂らして、首でネクタイを振りまわす。セーラー服をのける両手が、がむしゃらに乳果を揉みしだく。繊細な指は乳頭を好き放題に弾いて、肉体が一度に

感じられる最大の快楽に挑んでいた。

「あんああ！ ひあつろこ！ ろんなろころえで！」

胸の小突起はしこり勃つし、本来の出入り口でもクリトリスが充血中だ。口と同タイプの拷問道具で塞がれて、発情汁をだだ漏れに。

抵抗するには優しすぎる肉悦が、アナルの最深に雪崩れ込む。

ぐぼぐぼっ！ ぐぼ！ ぐぼぐぼっぐぼ！

「ろんなにひちや、やつああら！ んふうう、いひいむ！」

たった今大きなモノを排泄しているかのような放出感が連鎖した。実際は抜き挿しのペニスであっても、太さならではの排出が心地よい。雁首までひり出したら、括約筋で強烈に吸い上げつつ、脚をより狭く組む。

順番待ちの男子生徒も、淫らなアナルセックスを目の前に、待つてなどいられない様子で、各々がオナニーを始めた。

「次は俺な！ ハア！ まだかよ、早く出せって！」

「一周したらもつかいいいだろ？ ま、またやりてえ！」

それを真似て、鳳蝶の手は巨乳をこねまわす。穴が抉れるタイミングに合わせて、握力を強め、セーラー服の隙間で女肉をドリブルする。

アナル担当の男子はすでに限界が近いらしく、仁王立ちで目を閉じてまっていた。むしろ鳳蝶の腰のほうが、ひっきりなしに動いて、毎回のピストンを成功させる。

快感が、ひとつの甘美な飛翔感となり、頭の中身をゴツゴツ奪い取っていく。

「んはあらああああ……ッ！」

締めまりのない艶笑でギャグボールを噛み締め、悦びの一時を満喫する。果ててなお乳首を捻り続けるのが気持ちいい。

数秒の遅れで男子たちも、アナル生徒会会長に倣って、下半身の水をしぶかせた。

ビュルビュルビュルビュル！ ビクビクビク！ ビュルルルル！

ただしどれも、尿ではない白濁を、立派に実ったお尻に浴びせる。直腸でも無遠慮に汚濁を吐き出され、粘膜に熱く染み込んだ。

「だされ、へる……おひり、なか……だはれるの！」

「生徒会長って声もエロいな！ ハアッ俺も、俺も出さぞ！」

過ぎるも欠くもない芸術的な脚線美を、男性の体温がばらばらに伝い落ちる。スベルマは冷めないうちに、ニーソックスに染み渡り、レオタードと同じ粘着性を鳳蝶に味わわせた。セーラー服はたつぷりと涎を蓄え、古いものも水分を取り戻し、独特の生臭さを立ち込めさせる。それは臭いはずなのに、確認のため何回も嗅いで。

「する……こいの、はあ、に、におひ……！」

ガラスで仕切られた向こうでも充滿中らしい牝のにおいに酔う。

やがて蟹挟みのポーズは脱力し、鳳蝶はガラスの反対側で両足を降ろした。汗だくの乳果実を掴む手も剥がれ、レオタードとセーラー服が数分ぶりに直に重なる。



「随分慣れてるじゃねえか！　へへへ、マゾメイドに調教済み？」

「ち、違う……あふう、これは啓が、無理やりさせるから」

男性をどういたぶれば果てさせられるか、知識も経験も豊富すぎた。せつかく手が自由になっても、強制される肉悦に耐えるため、握るしかない。巨乳には複数ののひらが徘徊しており、太腿やお尻のラインも隅まで堪能されている真っ最中だ。

「チンポ嵌めたら急におとなしくなっちゃまったなあ。嫌なんだろう？　ハア、嫌なら『おやめくださいご主人様』って言え、エロメイド！」

とどめに肉穴のピストンが始まり、膣圧の急な変動に驚き、声が裏返ってしまう。

「あひあらあああああつ！　めつえくれる、あふ！　めくれひゃう！」

ぐちゅちゅつ、ずちゅ！　ずちゅ、ずちゅつ！

啓のモノしか知らない、結合自体がこれで三回目の肉壺を、雁太が乱暴に穿り返す。確信を持って肛門より狭い、と言える膣が、硬いエラに引っかかり、いつそうの抵抗と圧力を生む。体内で拡張感が前後する感覚に、どう抗えばいいのか、わからない。

「あつふああ！　あんつらめ！　そんなにしちゃ、つはあ！　んつあは！」

「こっちの口は、ハアッご主人様に素直すぎるぜ！　じつ、十秒も持たねえかも！」

腫れ上がった亀頭の位置を追いかけてまで、肉襞は貪欲に絡みついた。一回の抽送ごとに摩擦が甘い痺れを引き起こす。

爪先立つ右脚の筋が引き攣り、左脚を流麗に振り上げる。

ドクン……ドピュッ！ ドピュドピュドピュ！

浅い箇所まで後退する怒張が、いきなり液を氾濫させた。

「ひはああああッ？ や……だ、出しちゃ、や……いやああああ！」

「ハアハア！ いっけね、お嬢様に中出しバレちゃって、ッハア！」

男が腰をぶるぶるさせながら、鳳蝶の生殖器官に高熱の汁を注ぎ込む。間違はなく精液の温度と、飛び出し方だ。びゆるびゆる、と量を増やし、女蜜だけだった秘粘膜に汚濁を染み渡らせていく。

ピストンだけでは味わえない、熱い快感が浸透し、精子の存在を思わせる。

「中はやめて、はあ、で、できちゃうから……あくふう！」

「その心配はいらねえっての、もうできちゃってんだからな、つと！」

女性の尊厳を踏みにじった下衆が、逸物を引き抜くと、別の男がすぐ入れ替わった。

「へへっ暴発しちまったか？ 次は俺のチンポがいただきますぜ」

特に逞しいサイズの二本目が、淫肉の沼地へと、急ぎがちに龟头を埋めてくる。穴の開発には打ってつけの「精液ローション」が、一切の痛みを禁止し、かつ擦過を速める。

ずちゅずちゅずちゅ！ ぐちゅぐちゅ！

「かふあああつんああ！ かつかき混ぜ、だめ、せつせーえひ！」

より太いにもかかわらず、一本目の倍近い速度で肉棒は根元まで繋がった。同時に牡汁を薄く広げられ、膣筒の三百六十度を汚されてしまう。群生する肉襞が、攪拌棒に粘着気

味によく絡まり、雁首の位置を深めに捕捉する。

「おっ？ 確かに、ハア！ 早漏になっちまうのも、く、無理ないかもな！」

「いーじゃねえか。洗浄剤はこまめに足してゴシゴシしねえと、便器の掃除にはならねえからなあ！ ゲラゲラ」

耳障りな爆笑が男子便所で巻き起こる。このような連中にこれまで生活の一部を任せていたなど、おぞましい。そして今は男性に、生活のごく一部の道具として扱われる肉体に苦悶のねっとりとした汗を流す。

「やめな、さいい……もう、これ以上は、つつ抓っちゃや！ ひはあッ！」

忘れかけた頃に乳頭を抓られ、甘い快感が併発した。わざわざメイドの姿を真似た水着姿で、双乳と股座を裸で差し出す格好自体、男性の股間に媚びることしかできない。ふくよかな乳肉を念入りに押し揉まれつつ、火照った太腿も按摩される。

「ひやあッあ！ そこっそこお！ 突いちや、さっ触っちゃ！ んくあ！」

濡れそぼった紺色のスクール水着に包まれた細身が、右脚で伸びを。ずれさがったエプロンの上に巨乳を転がし、男たちの手を導く。誰に抱えられているかも判断できないポージングで、小首と髪を振り、快絶に悩乱する。

「ずちゅずちゅつ、ずちゅぬちやずちや！」

「おおっおうはあ？ やらっひろがる、ああアソコ、アソコひろがるからあ！」

潜伏中の剛直が前後にスライドを始め、肉洞をかき混ぜた。引き抜く動きではエラの形

を活用して、肉襲の波を逆流し、押し込む動きでは、粘膜を薄く引き伸ばす。二種類の摩擦がアンサンブルとなり、蜜壺に甘美な快感を閃かせる。

牝痺れが股座にわらわらと群がり、穴の中が無性にこそばゆい。それを相手が暴力同然に穿り、怒張で子宮を何度も打つ。

「見るよ、ハァ！ ザーメンがいい感じに泡立って、ハァ！」
「っああん！ はげしっ、いいいいい！ 当たって、あっあらっれ！」

精液と愛蜜の混合が、肉交に最適な滑りを可能にし、ぬちゃぬちゃと卑猥な粘音を立てまくる。肉太を丸呑みにする秘裂の合わせ目では、クリトリスが真っ赤に充血し、男どもの興味をそそった。

「おーおー、ポッキさせちゃって。犯されながら、エロいことばっか考えてんだな」
「ひあふううんっ！ そそっそこは、ひはあ！ あっああ！ 触っひやらめ！」

生まれつき敏感な肉豆を、別の男に指で弾かれた途端、視界が瞬く。膣と同じ痺れが全身を駆け巡り、しどけない唇から、色っぽい喘ぎとなって抜けていく。

「おっと！ お嬢様、オクチがお留守ですよ？ 生意気メイドのフェラゲット〜」
「んぶっおむうぐう!？」

それでも喘ぎ足りない唇に、大型のモノで栓をされる。予告なしに勃起ペニスを突っ込まれたのだ。それきり腹式呼吸を、すべて肺呼吸に切り替えねばならず、惨めな鼻水がびゅっとならぬと飛び出す。牡肉本体は、尿など比較にならない強烈な青臭さである。

えずいた分の吸引力が働いて、肉棒を頬張ってしまふ。

「はあつぢゆ、ら、らまいひなんて、よつよく、んもごお！」

強気に睨み返したくても、目を合わせようものなら猛烈な羞恥に駆られた。男性から見下ろされての嘲笑が、気丈な令嬢の精神力をボロボロに打ちのめす。笑いの対象となった肉体を、荒れる感情で過熱させ、悶え汗を追加する。

唇を破るペニスが勃起を増強し、口内容積を圧迫した。龟头表面に滑り落ちる舌が、裏筋の窪みを探し、小刻みに穿る。かつ、ヘッドドレスを相手の下腹になすりつけ、甘えるメイドの仕草さながらに。

「んぶつおほ、はあつ、あつああんぐ」

涙目の瞳を中央に寄せながら、吸いつく唇を幹胴に引きずり、口の中では、敏感な先端を舌で丁寧マッサージ。八方向に一回ずつ擦り、唾液を十分にたたえた舌腹で、優しく押し出す。唇を強引に奪い取った男のほうが我慢を始めるテクニクだ。

「すつすげえ！ どこでこんなフェラ、ハア！ たまんねえコレ！」

「ひあつふ、やつ近い、近づけない、れ……んちゅつば」

台詞と一致しない舌捌きを、唇の外でものたくらせ、赤腫れた龟头の側面にギザギザの軌道を繋いでいく。瘤肉が丸いからといって、円では終わらず、舌先に絶妙なブレを持たせる。すべて唇に口奉仕を強いられ、習得した小技だった。

「誰も舐めはく、なんつはあ！ んひああッ！」

側位セックスの相手が、話題の口淫を無理に覗き込もうとつんのめり、挿入がまた深くなる。子宮にめり込み、肉悦の快美感に鳳蝶も震えて、舌で喘いでしまう。

そのつもりがなくとも、肉棒と小顔の距離が近すぎて、唇の呻きはキスになった。

「ちかふぎ、れ……くつくさひ、から、のけれ……んふ」

「おっいいぜ！ ハア、そうそう！ 従順なメイドらしくなってきたなア、あとは偉そうに言葉遣いを矯正してやらねえと。へへっ、聞いてんのか？ エロメイドよオ」

不衛生な玉袋にむしゃぶりついて、もごもごと頬を動かし、遠慮なしに啄む。皮を優しく噛んでから、二枚の唇を、横笛を吹くようにスライドさせていく。

最後に先端を拾ったら、再び口の中へ。

「ひはあ、もっ、もうやめ……こんなっお、んぢゅっおおもぐ」

濃厚な腐臭を嗅ぎつつ、肉槍の刃を磨く。口淫を嫌がる気持ちが強くても、始まった奉仕を終わらせないと解放されないことは、身体に叩き込まれていた。

「こんなに勃起してくれてありがとうございます、だろ！ ご主人様に対する忠誠がなくてねえ口はこうだ、ハアッ、メイドらしく謝ってみろ！」

「んごもおおおッ！ ごふっ、はあつぶ……んぢゅ、ごひゅ、じんあま……！」

反抗的な唇も、肉棒で直に寝けられる。過熱中の頭は朦朧として、台詞の如何を考えるどころではなく、性欲処理の務めを口走った。

「もうひわけ、んぶう……ごらいません、んぶはあッ！ ひあある、んぐも！」

すでにひと通りのサーピスができる新入りのメイドに、他の勃起も一段と硬くなる。両手に握った二本が、カウパー液の玉を飛ばす。

「俺も触ってるだけじゃハアッ、全然足んねえよ！ おい順番まだか？」

「便器女のカラダそのままにしてろよ？ 俺が、ハア、いい手本見せてやっぜ」

水抜きをくぐって臍の肌へと、新しく一本を接続された。エプロンの下でスクール水着が、お腹に向かって盛り上がり、ざらざらとした生地で剥き身を擦り上げる。

「ひあぐっおなは！ おはあれ、うっうごいへます、うもっご！」

大勢に採まれる中央で、鳳蝶が柳腰を上手にくねらせると、そこでもストロークが完成する。肉穴を犯す男が背後にまわることで、立ち位置がスムーズに変わり、他の者も無闇やたらと肉砲を突進させてきた。

「待つれくらはい、おおすぎ、はぐ！ あもっおぐちのも、んむ、うっ動かされあら」

「よく喋るし、しゃぶってくれる穴だけ、ハア！ 生意気はもうおしまいかア？」

ヘッドドレスを掴まれて、フェラチオは暴力的なイラマチオとなり、肉体を串刺し同然に弄ばれる。唇と女穴、水抜きで三者三様のピストンが暴れ、男の硬さを主張する。

「ずちやっぐちや、ぢゅぽ！ ずちやぐちやずちや！」

屋敷の令嬢よりも、集団レイプに悦がるメイドが板についてきた鳳蝶は、無意識に腰を弾ませた。水浸しの肌にスクール水着と、不特定多数の男の手を吸いつかせ、愛らしいデザインのリルで踊る。

「あっああん！ ひあっおも！ おやめくらはい、おもぐ、うつああうぐ！」

肉穴を男性の太さで穿られつつ、別の一本と浮気の接吻を深め、どちらからも濁った涎を垂らす。体温を上まわる熱い蜜が、無限に滴り、結合部を適度に潤す。

男の股座にしゃぶりつく鳳蝶の美貌は、淫欲の朱色に茹で上がり、汗を拭うよりも唇の吸い上げを優先した。舌を旋回させ、得意のギザギザタップでエラをくすぐる。

「んあつふ、ひっいきそおれす、おぶ！ もおイクのっ、わはくし！」

切なくすらある官能の高まりに、瞳をとろんとさせ、体内に響く抽送音を数える。男根への嫌悪感があっても、引き返せないところまで来てしまつて、忠実におしゃぶり。

「便器イっちまうって？ ハハハッ、便器がイっちまうんだと！」

オモチャを果てさせる目的で、男どもが一斉にスピードを跳ね上げた。肉穴では一回の突き込みが一メートルにも感じられる。唇も荒々しく「穴」として使用され、息苦しい。

「ほうらお嬢様、ちゃんとしやぶって！ ハア！ こうして！」

「んおっおぐッ！ わりっいいい！ いぐおおおおお」

鼻を摘まれると、まともに息ができない。もがく舌は瘤肉の丸みで弾かれて、どうにもできない悔し涙で頬を濡らす。自慢のヘアスタイルは無造作に荒らされ、ヘッドドレスの留め具が外れそうになった。

オーガズムの前兆が始まり、四肢を強烈に引き攣らせていく。

「んぶうううッ！ うっんうく！ ごしゅいんはま、んふっあうぐっむ！」

右脚と左脚で床と天井を繋ぐかのような、新体操のポーズをしなやかに決め、牝穴と水抜きの両方に男性の下半身を飛び込ませる。

ぐちゅぐちゅっ！ ぱんっぱんっぱんっぱんっ！

「あひっいあら、おぐ！ もっもおいぐ、んうおご、あむっ！ おっおお！」

軽快な猥音を唇でも奏で、浜の魚のように腰で打ち跳ねながら、肉穴メイドはぞくぞくと太腿を震わせた。痺れあがった穴を擦らせ、急速に熱く、激しく昂っていく。脳裏の混濁を整理してなどいられず、身体が勝手に求めてしまう。

「あっんあ！ あむう！ はおっぢゅ！」

膣の入り口から子宮のドアまで、熱痺が走り、神経に快感をばらまかれる。とどめに尻穴の秘密が、連動的に前の締めつけを強化した。

自慰のように自ら高めるのではなく、相手の高まりに乗せられ、強制される快楽が、狭苦しい肉壺の最奥を乱打する。

ぱんっぱんっぱんっぱんっ、ずぱんずぱんずぱんずぱん！

「おあむううッイふ！ いふゅっいっひゃあつ、あああああっおろ！」

口枷の肉太が遠のいた分、涎の糸を舌で追う。力ない瞳が、流し目みたいな上目遣いで成人男性の劣情を、最高潮に煽り立てる。

肉悦の異常な甘さと味わい深さに、鳳蝶は自分を保ってはられない。右脚だけで立つ姿勢でも、手首を活用したハンドシェイクで、肉棒を懲らしめる。右手も左手も、湿った

人差し指を雁首に巻きつかせつつ、幹胴を繊細に揉んで、蜜を先走らせた。

「ハアハアッ、ハア！ ご主人様がお前に興奮してやってんだぞ！ ハアハア！」

「お礼はどうしたあ？ ハアッ、イかせてもらうんだろ、変態エロメイドが！」

獣の息遣いが幾重にも重なり、トイレの中に反響する。間もなく、全員が言葉のひとつもままならず、動物の呼吸に専念し、夢中で腰を突き動かす。それを唇と牝花弁で受け止める大忙しのメイドも、やっと許された肺呼吸を全開にして、大暴れ。

「ひぐっイクの！ ご主人様にイかせてっ、ひああ！ イかせていただきます、ひあぶっう、おごっ！ わはくちゅっ、んぶうううッ！」

涙を呑めない唇は、ペニスを苛烈に吸い上げた。肉棒を握るより遥かに弱い力で、華奢な肩をわななかせ、脇をできるだけ広げる。汗だくの巨乳を、陵辱者たちの乱暴な手つきに晒し、乳頭もびんびんに疼かせる。

これでは本当に、主人の下の世話と性欲処理に勤しむ精液便所。

「あふっんぶ！ ほんろにわはくひ、へんたひ……やっんぐ！ へんふあいエロメイ、ドになっれ、おあうあふ、おおっんっあぶあ！」

想定外にクリトリスも弄られて、快楽電流を最大に炸裂させ、全身の疲弊を悶絶に入れ替えていく。ピンヒールの踵が少しだけ浮いて、秒を刻んだ。

そのリズムに合わせて、全員が怒張を突進させる。耐えられなかったモノから、先走り汁を白濁で増量し、リタイアしてしまう。

ドビュドビュッ！ ビュクビュク！ ビュルビュルビュル！

いよいよ欲望の白弾が飛び始め、白い腕や太腿に粘着した。口の中でも、唾液と異なる灼熱が氾濫し、肉砲が外れる。口を開けておけば、追加で注ぎ込まれる。

白い絵の具みたいな生臭い粘液を、唇からだだ漏れに。

「ご主人様たちのっチンポ、はあっ硬ひのが、せーへき！ んふっああっせーえひ便所れイっちゃう！ ひいふあっはあ！ オマンコ便器イクっイクうイク、イク！」

拍動する肉根をぎゅっと握り締め、水着姿のメイドも、今日一番のバックスイングを腰で放った。肉太がぐりつと子宮に命中し、電圧を一気に膨張させる。

全身の肌が裏返しになったかのように強く痺れてしまう。

口から飛び出したのは、教えられた通りの謝礼。

「いいいいいい、ぶあっおくも！ こすれてるの、おっオマンコにつ、あり、ありあとおごはいますうう！ ろ主人様のチンポれ、イクッ、あああああつもおいつイク！」

頭の中はとろとろで、言葉を選んでいられず、性器は俗称が手軽かつ適切だ。

集中的な痺れの狂おしいオマンコで、限界チンポを食い締める。これが今一番手っ取り早くて気持ちいい。

「ご主人さまああああああああああああああああああああ——！！」

精液便所は甲高くないななくて、猥褻なまでに罪作りな肉体を、存分に打ち震わせた。肉豆をびんつと指で弾かれたのがスイッチとなり、身体中を快美感に食い荒らされる。お尻



複数ののひらが、柳腰から豊乳の曲線を這い上がっては、落下していく。ほぼ同じ周りで、太腿からもボディラインをなぞり上げられる。ピンク色のレオタードで強調される股間には、キス魔が次々と入れ替わり、クリトリスに素早く舌を添えられた。

「ソコ痺れるっ！ しびれひゃ、あっああ！ やああん、もっ、もお！」

膣肉をこん棒で抉られながら、肉豆を舌で弾かれるのみならず、指でGスポットを穿れもする。ヴァギナだけでも快楽は三重奏。さらにはアナルを複数の指で攪拌されて、生理的な胴震えも起こしてしまう。

「あっあん！ ひあっんぢゅ！ はお、おっオシリ！ やっあは！」

肛門快美がぞくぞくと込み上げ、排泄と紙一重の拡張感を差し込む。指の数は一定ではなく、脱落と追加が繰り返された。下級生女子の指使いは徐々に激しさを増し、生徒会長への想いをアナルに注ぎまくる。

「いいいですう！ あんっ！ ツアウエッセル様あ見て、私のイクとこ見てえ！」

同時進行で新体操部の全員がオナニーに耽り、牝の吐息と湿ったにおいを、空气中に蔓延させる。上級生美女は、本来部外者である少年の股間に、豊かな巨乳を押しつけた。汗まみれの太腿を左右水平に弾ませ、悩ましく悦がり狂う。

「あんっんぷ！ ひあっ待つれ、わたくひ、いいいんぐ、はあっふぢゅ！」

これみよがしに細腰をくねらせ、男子の急所を挟んだ巨乳を、ひたすら搾り抜く。肉体の快楽は、引き返せない一線をとづくに越えており、この勢いに便乗して高めていなければ

ば、どうにかなりそうだった。

(だめ……もう、じっとして……らん、ない……!)

脳裏では桃色の霧が濃くなつて、自分を保つていられない。今なお女子集団による愛撫の手が、全身を這いまわつており、すべてが奇襲だ。レオタードのラインを、正確無比になぞられ、腰の捻りまで追跡される。

「やめっはぐ、おおぐ! ひあつぷ、んぶっは」

唇は断続的に亀頭で塞がれ、生唾をたたえる舌は、喋るよりも舐める行為ばかりを優先していた。牡肉の苦みが染みるのを、呑みくだしては、丸い亀頭を丹念に磨く。

「このフェラ好きめえ! はあつ、ほんとにイヌみたいに舌出して! ああつ牝イヌ生徒会長の変態テクで、ぼっ、ボクもうイカされちゃう!」

先走り汁をびゅつと飛ばし、肉砲が急速に過熱した。発作に陥る少年の両腕には、レオタード一枚の女子が絡みついて、それぞれ股座を弄らせている。

「啓様っああん! 私も犬ですう、お姉様みたいな変態マゾ犬なんれすう!」

王様状態である少年のペニスを独占する鳳蝶も、巨乳を打ち震わせ、快楽で追い上げていく。愛撫の荒波に晒されながらも、新体操選手の肉体はしなやかに、適当な女子の小顔に肉穴をなすりつけた。白濁を湧き立たせ、クラブの先までひくつかせる。

数時間前は淫乱メイドだったのが、今は犬扱いされて悦ぶ、変態マゾヒスト。

「ああっふ! んっんぷは、はぐっ! 違う……わたくひ、メス犬なんかじゃなくて、性

処理のメイド、れもなくて……やっああ！ オマンコとケツ便所れいつひゃうッ！」

風紀を乱すことに肉体が夢中で、錯乱し、自分が誰だったかも思い出せない。浮かんだ卑語を連発しつつ、快悦の荒波に悶え狂う。

「チンポ入つれないのに、オッパイ！ オッパイ擦れるの、あんっ硬いの！」

生乳は少年の下半身に密着し、谷間に閉じ込めた肉棒を、ぎりぎりまで苦しめた。火傷みたいにひりつく乳芽とクリトリスには、甘い電気の針が刺さる。

「オッパイがオマンコみたいに痺れれ！ ひあつもおらめ！ ちくびイっへる！」

牝の昂りを最高潮に熱化させる。女穴と尻穴も高熱を蓄え、汁を煮え滾らせている。

間もなく女子たちの声から言葉がなくなり、獣じみた呼吸ばかり重なつた。

ヌチュヌチュ、ヌチャ！ ハアハアッハア！ ヌチャヌチャッ！

全員に色香を振りまく生徒会長も、宴の参加者では最後にアへ顔を晒し、瞳をとろんと酔わせてしまう。ペニスが脈動する正面で、無防備に大口を開いて、菌と菌を涎で繋ぐ。

「ああああイクッ！ いいっイかされちゃうの、わたくしッ！ んああは！」

蒸気みたいに熱い吐息を吐いては、ぬらつく舌で、男子の先端を柔らかく包み込む。相手の下半身が勝手に暴れるせいで、乳圧は秒ごとに変動した。

真っ赤に腫れ上がったペニスが疼く。少年も、前兆めいて胴を露骨に震わせる。

「生徒会長つてば、はあつ、すっかりチンポ狂だね！ ボクのこと勃起させて！ どーせアタマの中はチンポのことばかり！ んはあ、考えて！」

本当にペニスのことしか頭になくて、凶星だった。太さと硬さ、熱さを、柔乳でこそ遅く感じ、谷間を擦りあわせてばかり。

「チンポなんてっ、やあっあぶ？ んむっ、むううう……つぶはああ！」

亀頭に涎たっぷりの口付けをして、表面を舌で磨きつつ喘ぐ。鼓動のテンポは加速的に跳ね上がり、呼吸も大いに乱れた。声が甲高くなり、自分の耳にもいやらしい。

「ひはあっああ、んふあ！ らめっ、もっもう！ くふうっイクから！」

鳳蝶の肉体には次から次へと、女子の手が飛びつく。曲線をなぞられつつ、レオタードの生地を薄く伸ばされ、穴には指を挿し込まれた。唇の端に指を引っかけられるのを、舌で押しやろうとして、鳳蝶は涎を垂らしてしまう。

どこまでも高まる快楽に頭は錯乱状態だ。

「ひいっイク！ あいいイク！ わたくしっはあ、ばっ、パイズリ！ パイズリオマンコレイっひやう、もおイクうううッ！ オッパイも、はあっお、おオマンコもお！」

狂おしい悦痺れが始まり、肛門が指の束を、肉花卉はこん棒を食い締め、奥に向かつてぎゅうっと苛烈にうねる。吸水性のレオタードでは汗の全部を回収できない。性感帯を中継点にしてびりびりと走る、甘い電流が、ひとつの大きな快楽となっていく。

双子のニップルが血管そのもののように脈打った。

飼い主の命令が本能に刷り込まれていて、逆らえない。

「みんなをこんなエッチにして！ はあっマゾ犬、ごめんなさいしろ！ はあはあ！」

「ごめんなはい、ひはっわたくひ……いいいいいい、いいいいッ！」

与えられる快感が多くて、優しくて、強すぎて。鳳蝶は一度だけ臉を押し上げ、涙ぐむ瞳から、半目がちにみるみる力を失くしていく。

飛翔感に脊髄を打ち上げられて、柳腰がびくと跳ねた。

「わたくし！ わたくしマゾ犬に、ひぎいつ生まれ！ 変態なんれす、ごめんなさああつ、イクのマゾ穴あああああああああ——！」

頭の奥のほうで火花が散り、真つ白な恍惚が津波のように押し寄せてくる。思考の枠内が空になるまで洗浄され、何も残らない。

無自覚にも甘美な肉悦に酔いしれて、クラブと腔肉の隙間から噴水を撒き散らす。

プシュッ！ ……プシヤアアアアアアアアアアアア！

小穴を噴かせつつ、肛門では最高数の指を吸い込む。

「餌の時間だよ、生徒会長っはあんは！ もっもう出る！ あっあっあっ！」

ふくよかな巨乳に抱かれる贅沢者が、ありつただけの欲望をぶちまけた。

どびゅどびゅ！ びゆくっ！ びゆるびゆるびゆるびゆるびゆる！

牡蛎が俄に白濁し、スペルマの弾丸を放つ。オーガズムで放心中である美貌にびちやびちやと、汚らしく粘着して、牡の原液を強烈におわせる。鳳蝶本人の身体もかなり火照

っているはずなのに、亀頭から飛び出す子種はさらに、異常に熱い。

「ひあっぷ、んふ、あつうい……ちんぼ、じる……！」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>



KILL TIME COMMUNICATION

http://ktcom.jp/

二次元ゲームノベルズ

二次元EXノベルズ

二次元ゲームノベルズ

二次元EXノベルズ

二次元ゲームノベルズ

二次元EXノベルズ

二次元ゲームノベルズ

二次元EXノベルズ

二次元ゲームノベルズ

二次元EXノベルズ

二次元ゲームノベルズ

二次元EXノベルズ

二次元ゲームノベルズ

二次元EXノベルズ

二次元ゲームノベルズ

二次元EXノベルズ

二次元ゲームノベルズ

二次元EXノベルズ

二次元ゲームノベルズ

二次元EXノベルズ

二次元ゲームノベルズ

二次元EXノベルズ

二次元ゲームノベルズ

二次元EXノベルズ

二次元ゲームノベルズ

二次元EXノベルズ

二次元ゲームノベルズ

二次元EXノベルズ

二次元ゲームノベルズ

二次元EXノベルズ

二次元ゲームノベルズ

二次元EXノベルズ

二次元ゲームノベルズ

二次元EXノベルズ

二次元ゲームノベルズ

二次元EXノベルズ

二次元ゲームノベルズ

二次元EXノベルズ

二次元ゲームノベルズ

二次元EXノベルズ

二次元ゲームノベルズ

二次元EXノベルズ

2008年4月17日発売

Vol.40

2008年4月17日発売

Vol.40

2008年4月17日発売

Vol.40

2008年4月17日発売

Vol.40

2008年4月17日発売

Vol.40

2008年4月17日発売

Vol.40

2008年4月17日発売

Vol.40

2008年4月17日発売

Vol.40

2008年4月17日発売

Vol.40

2008年4月17日発売

Vol.40

2008年4月17日発売

Vol.40

2008年4月17日発売

Vol.40

2008年4月17日発売

Vol.40

2008年4月17日発売

Vol.40

2008年4月17日発売

Vol.40

2008年4月17日発売

Vol.40

2008年4月17日発売

Vol.40

2008年4月17日発売

Vol.40

2008年4月17日発売

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- **ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快なBlog**も更新中!
- 期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!

VALKYRIE



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!